

PATRIA

タイトル	祖国	PATRIA
著者	フェルナンド・アランプル	Fernando Aramburu
出版社	トゥスケッツ	Tusquets Editores
出版年	2016年	
ページ数	648ページ	
言語	スペイン語	
読者対象	一般	
ジャンル	文学	
レポート作成	小原京子	

概要

バスクの分離独立を目指す武装組織ETAが武装放棄を発表したのを知り、ビトリは、テロリストに殺された夫の墓前で、彼らが住んでいた家に戻る決心をしたと報告する。彼女と家族の人生をめちゃくちゃにしたテロ事件の前も後も、彼女に嫌がらせをした人々と同じ場所で暮らすことができるだろうか？

ビトリの存在は、村の、特に隣人ミレンの見せかけの平穏を乱すことになる。ミレンはかつて親友だったが、ミレンの息子のホセ・マリは、テロリストとして投獄中で、ビトリにとって最悪のテロ事件の容疑者だった。かつてはあんなに仲の良かったふたりの女性の人生、子どもたちの人生、夫たちの人生に毒を振りかけたのは何だったのか？

ふたりの心の傷と揺るぎない信念、痛みと勇気をつづる。テロ事件を挟んだ彼らの物語は、政治的ファナティズムによって破壊されたコミュニティの中で、「忘れること」は不可能でも、「許すこと」は必要だと読者に語りかける。非常に名誉あるスペイン文学批評家賞（2016年）受賞作。

おもな登場人物

チャト：バスク地方の村でトラック運送会社を営む実業家。ある雨の日の午後、自宅前でETAに暗殺される。

ビトリ：チャトの妻。バスク独立派が多数の村で隣人たちから村八分にされながら、夫を殺害した者からの謝罪を求める芯の強い女性。

シャビエル：チャトとビトリの長男。サンセバスティアンで医者として病院勤務。母の面倒をよく見ているが、自分自身の幸せからは逃げるように孤独を酒で紛らわしている。

ネレア：チャトとビトリの長女。サラゴサ大学を卒業後、財務省勤務。30代半ばで結婚しビルバオに住んでいる。子どもができないこともあって夫婦仲はしっくりいっていない。

ミレン：ビトリの隣人で親友だったが、チャトがETAの標的になったことから疎遠になる。

ホシアン：ミレンの夫。心優しい気弱な男性。鋳物工場勤務。

アランチャ：ミレンとホシアンの長女。結婚して2児をもうけるが、下半身不随になり実家に戻る。村で唯一のビトリの理解者。

ホセ・マリ：ミレンとホシアンの長男。ETAの軍事部門で活動するテロリスト。

ゴルカ：ミレンとホシアンの次男。読書好き。バスク語の達人で文才がある。同性愛者。

あらすじ

スペイン北部バスク地方のギブスコア県サンセバスティアンにほど近いとある村で生まれ育った幼馴染のビトリとミレン。1963年の夏、1か月違いでふたりはそれぞれ結婚する。ミレンは鋳物工場に勤務する夫ホシアンと、長女アランチャ、長男ホセ・マリ、次男ゴルカの5人家族。一方ビトリはトラックの運送会社を経営する実業家の夫チャトと、長男シャビエル、長女ネレアの4人家族。夫同士もカード仲間で、土曜の夜は美食クラブ（仲間同士で料理を作って楽しむ会）、日曜は一緒にサイクリングに出かける親友だった。経済的な格差はあるもののふたつの家族は近所で仲良く暮らしていた。

だがバスク独立運動がふたつの家族の間に亀裂を生んでいく。ミレンの長女アランチャは結婚し、村を出てギブスコア県第三の都市レントリアに移った。長男のホセ・マリは、過激派組織「バスク祖国と自由」（ETA）の理念に心酔し闘争活動に参加している。次男のゴルカは物静かでいつも自室で読書にふけっているが、兄に引きずられるようにETAの活動を手伝うようになる。ある日チャトに、ETAから「協力金」を要求する手紙が届く。それは、実業家のチャトがETAの標的になったことを意味していた。その途端、バスク独立派がほとんどの村では、それまで長年親しく付き合ってきた隣人たちが、手のひらを返したように冷たくなった。チャトの会社ではストライキが組織され、壁には「労働者を搾取する者」としてチャトを糾弾するペンキの落書きがされた。親友だったはずのホシアンは、嫌がらせや暴力を使ったやり方は好きではないが、村全体を支配するETAへの共感と恐怖を前に、口をつぐみチャトを避けている。チャトは将来村を出ていく可能性を考え、サンセバスティアンにマンションを購入する。チャトとビトリの子どもたちは村を出ていき、シャビエルはサンセバスティアンの病院で医師として勤務、ネレアはアラゴン州のサラゴサ大学に入学する。チャトは1回目の要求に応じて金を支払ったものの、2回目の手紙で

は途方もない金額を要求され、素直に従わなかったため、ある雨の日自宅前で銃殺される。村人たちは事の次第をそれぞれの家のカーテンの後ろから見ていたはずだが、助けを求めて泣き叫ぶビトリのもとに駆け付けてくれた者は一人としていなかった。それでも誰かが通報したらしく、警察と救急車はすぐにやってきた。「Te quiero (愛してる)」というビトリの言葉に送られてチャトは息絶える。チャト暗殺後も、通りですれ違っても無視される、家の外壁にペンキで敵意に満ちた落書きをされる、商店でものを売ってもらえないなど、ビトリへの嫌がらせは続いた。チャトは村の墓地に埋葬されるのが本来だが、村の教会の司祭ドン・セラピオから墓碑銘には暗殺を示唆することは刻まないようにとほのめかされ、娘のネレアからは命日も暗殺の日とずらした方がよいと言われ、結局チャトはサンセバスティアンの墓地に埋葬された。チャトの葬儀や埋葬への参列者も数えるほどだった。でもビトリが一番許せなかったのは、娘のネレアが参列しなかったことだ。ネレアはETAに暗殺された男の娘だということを村以外の人に知られなくなかったのだ。ETAの活動家が英雄のように祭り上げられる一方で、ビトリは村八分にされて、夫の暗殺から数週間後、夜逃げするようにサンセバスティアンのマンションに引っ越した。それから年月が経ち、ビトリは体調を崩していた。医者になった息子シャビエルの説得で健康診断を受けた結果は癌だった。本人はその事実を無視するように積極的に治療を受ける様子はない。夫をテロでなくして以来、希望も信仰心も、生きる気力もなくなってしまった。長女ネレアは結婚してビルバオに住んでいるが、子宝に恵まれないこともあって、夫婦仲はしっくりいっていないようだ。

2011年1月10日、ETAが恒久的停戦を発表した翌日、ビトリは夫の墓前に、暗殺事件の真相を知るため村に戻る決心をしたことを報告する。暗殺チームの中に、ミレンの長男ホセ・マリがいた疑いがあるのだ。ホセ・マリはETAが起こした複数のテロ事件の実行犯容疑者として電気ショックなど拷問も含む厳しい取り調べを受けアンダルシアの刑務所に収監されていた。ミレンは1か月に1回、スペインを南北縦断して息子の面会に行っていた。ビトリは目立たないようにこっそりと村に通っていたが、バスの中や、通り、バルでビトリの姿を見かけた村人たちの胸はざわつく。特にミレンはビトリの真意を測りかね、今度は自分が攻撃される側になったような被害妄想を抱きいらだつ。司祭のドン・セラピオは彼女の存在が村の平穏を乱すので来ないようにとさり気なく忠告する。服役中のホセ・マリはETAが弱体化し、武装闘争放棄の道を選んだことを受け入れられないでいる。自分は何のために人生を犠牲にして戦ってきたのだろうか。ホシアンは既に退職し、昼間は野菜づくり、夜は仲間とバルで飲みながらカードゲームをして過ごし、息子の面会に行くこともなく相変わらず逃げて暮らしている。文才に恵まれた次男のゴルカは、ある詩のコンクールで入賞し、村人たちに祝福されるが、ある日バルで賞金全額をETAへの「協力金」として拠出するように強制されたこと、ビルバオの本屋でバスク語を生かした仕事を見つけたことをきっかけに村とは距離を置くようになる。偶然出会ったアーティストのラムンチョ(男)と意気投合し、アシスタントとして一緒に暮らし始め、やがて同性結婚する。子どもたちがみな村から出ていく中、ミレンの長女アランチャは変わり果てた姿で出戻っていた。ずいぶん前から夫婦仲が険悪で、気晴らしに娘アイオナとマヨルカ島にバカンスに出かけたが、旅先で脳卒中を患って左半身不随になり、離婚して実家に帰り、車いすでリハビリ生活をしている。会話はiPad

だ。そんなアランチャだけが、村で唯一のビトリの味方であり理解者だった。アランチャの仲介でビトリは服役中のホセ・マリに手紙を書く。ホセ・マリを不快にさせるつもりは全くないこと、彼女には憎しみや恨みなどはないこと、手紙の目的はチャトがどんなふう死んだかをできるだけ詳しく知ること、特に誰が撃ったのかをホセ・マリの口から聞かせてほしいこと、チャトを殺した人が謝罪してくれさえすれば実行犯を許す覚悟だということ、そうすれば心残りなく平穏な気持ちで死ぬだろうと。

この手紙を受け取り立腹したホセ・マリは、敵意に満ちた手紙を一気に書きあげる。後悔はしていないこと、バスクの独立を目指しETAのメンバーであり続けること、手紙を書くのは最後だと。だがホセ・マリは思い直し翌日もう一通の手紙を書く。チャトを撃ったのは自分ではないが、誰が実行したかは問題じゃない。あんなことが起こらなければよかったと思うが、許しを請うのは難しい。自分の思想を守り抜いた結果だ。自分の問題は祖国を愛しすぎたことだ、と。

さらに後日、最後の手紙がビトリに届く。

ビトリへ

姉の勧めに従い、手紙を書くことにしました。僕は口数が少ない男だから、直接本題に入ります。ビトリと子どもたちに謝罪します。本当に申し訳なく思っています。時間をもとに戻すことができるなら、そうしたい。でもそれはできない。ごめんなさい。どうか僕を許してくれますように。今僕は自分への罰を償っています。ホセ・マリ

手紙を受け取ったビトリはチャトの墓前に報告に行く。雨が降っていた。その数日後、村でビトリとミレンがすれ違う。村人が注目する中、二人は短い抱擁をする。離れ際に一瞬目を見つめあったが、一言も言葉は交わさなかった。

所感・評価

物語の舞台は、スペイン北部ビスケー湾岸、ピレネー山脈西端に広がるバスク地方。そこにはスペイン語ともその他のどんな言語とも系統が異なるバスク語を話す人々がいる。本書のタイトル『祖国』が意味するのは、スペインではない。バスク人の故国バスクだ。独裁政権下で抑圧を受けたこともあり、バスクの国家としての独立を目指して、1959年武装集団「バスク祖国と自由」(ETA)が結成され、政府要人の暗殺や爆破行為によって800人以上の犠牲者を出した。当時は、バスク地方では中央政府に対する一般市民の反感もあり、ETAは共感を得ていたが、2

1世紀に入って組織は弱体化し、武装闘争放棄を宣言している。

バスク独立という理想の旗印の下、暴力もいとわない闘争に否が応でも巻き込まれ、恐怖で支配され、沈黙し、あるいは故郷を後にしたバスクの人たちがその時代をどんなふうと感じ、生きてきたかは、これまであまり語られてこなかった。それを経験した人たちは早く忘れてしまいたいのかも知れない。だが、自身もバスクのサンセバステイアンで生まれた著者フェルナンド・アランプルは言う。「私も当時のバスクの状況の犠牲者だといえる。過去に起きたことを何もなかったかのようにふたをすべきではない。ピカソが“ゲルニカ”を描いて内戦の悲惨を普遍的に伝えたように、作家、ジャーナリスト、画家、写真家などはそれぞれのやり方で、何があったか、人々がどう生きたかを後世に残すのが使命だ」と。そして多くの読者に伝わるよう簡潔な表現で、この大胆で感動的で読む者に様々な考察を促す小説を書き上げた。

『祖国』は、バスク独立運動の政治的イデオロギーによって翻弄され破壊されてしまったふたつの家族9人の30年間を描いた物語だ。その9人が語り部となり、9つの異なった立場と視点から物語は語られる。例えばキーとなるチャトの暗殺の場面も9人それぞれのバージョンで描かれる。スペイン語版600ページ以上の長い小説だが、4~5ページの短い章125から成り、それぞれに内容を示唆するタイトルがつけられている。プロローグやエピローグ、註釈などはないが、バスク語の地が舞台だけあって、バスク語がたくさんちりばめられており、原本では巻末にバスク語の語彙集がありそれを参照しながら読み進める形になっている。訳す場合は、バスクの歴史や言語に詳しい人のアドバイスが必要だろう。

ビトリとミレンが偶然すれ違って、ぎこちなく短い抱擁を交わす最後のシーンは、そっけない感じも受けたが、過去を忘れることはできなくても、許すことは必要だというポジティブな希望のメッセージを送っている。バスク独立運動というスペイン近代史の大きな時代の記憶を風化させないため、読み継がれていくべき一冊。

「ABC紙」文化別冊と「エルコレオ紙」で、2016年の最も優れた本に選出され、ノーベル文学賞作家マリオ・バルガス・リョサは「これほど説得力があり感動的で、巧みに構成された本は久々に読んだ」と絶賛。また、スペインだけで、3か月で12万部発行され、2016年最も売れた本ベストテンに入るなど大変話題になっている作品（2017年7月現在、第16版、販売部数275,000部）。ただし、日本の読者には、遠いテーマでどれだけ関心を持ってもらえるかは疑問が残る。

2016年スペイン文学批評家賞、フランシスコ・ウンブラル賞受賞。

試訳

（第76章から抜粋：370~372ページ）

昼寝のあと、チャトはコーヒーポットの底に残った冷めたコーヒーを飲んだ。チャトのうなる声が聞こえて、ビトリは、「新しいコーヒーを淹れるわ」と言ったが、チャトはビトリがソファで腕を組んでうとうとしているのを見て、「いらぬ、急いでいるから」と断った。

チャトが家を出たのは4時少し前だった。ビトリは今になって、玄関まで行って夫に行ってらっしゃいのキスをしなかったことを悔やんでいる。それが人生で最後のキスになったかもしれない。長年連れ添いふたりの子どもも設けたのだから、コーヒーが熱いか冷たいかなどというばからしい会話ではなく、もっと心のこもった親密な別れをすべきだった。

「聞かれても、覚えているのは音だけ。最初は、仕事に出かけて行ったときのドアが閉まる音。階段を下りていく音。それから何も聞こえなくて、私はソファで目を閉じて、あと30分くらい昼寝しようか、なんて考えていた。すると突然、銃声が聞こえた。何発かは聞かないでちょうだい。でも一発じゃなかった。何が起きたかすぐわかって、バルコニーに駆け寄ると、チャトが歩道に倒れているのが見えた。他には誰も見えなかった。私はチャトを撃った人は見てない。ひとりだったかどうかもわからない。その場でじっと見ていたわけじゃなくて、大急ぎで通りに下りて行って、血を見て、狂ったように叫んだ。誰か出てきて助けてくれたと思う？

お父さんの体を起こしたかったの。この人を立たせなくちゃいけない。すごく重いんだよ。2人が3人でなら起こせたかもしれないけど、でも誰も来てくれなかった。だからお父さんに話しかけ始めた。そのときは動転していたのね。こんなことを言ったよ。愛してる。そんなことお互いに言ったことなかったね。恋人同士の時だって言わなかった。そんな言葉は出てこなかった。ただ、愛しているということを示していた。それで十分。でも、私は話して、話して、話し続けなくちゃいけない。そうしないとこの人は私のもとから離れて行ってしまふ。あの世に行くなら、少なくとも、私がお父さんを愛していたことを知っておいて欲しかった。誰も助けてくれなかった。通りでひとりぼっちだった。どの窓も閉ざされていた。ひどい雨だった。ほんとに誰も出てきてくれなかったんだよ。全てをレースのカーテンの後ろから見ていた誰かが、警察が救急車に電話してくれたんだらうね。そうじゃなければ、あんなに早く到着した理由が説明できないよ。10分後にはエルツァインツァ(バスク自治警察)がここにいた。そしてすぐ後に救急車も来た」

電話が鳴った。ネレアかしら？

ビトリは息子に急いで電話に出るように合図した。シャビエルは電話のわきに立っていたので、体をねじって腕を伸ばした。

「もしもし」

「ETA万歳！」

受話器を置いた。

「ネレアじゃなかったみたいだね」

「とことん僕らを傷つけることにこだわる奴らがいるんだ。電話は取らない方がいい」

「ネレアが電話してきたら？」
病院からの電話もかかってくるはずだ。
「心配しないで。僕にまかせて」
シャビエルは番号をダイヤルし、あいさつし、事情を話し、質問した。たらいまわしにされ、そのたびに番号をメモしてはその番号にかけた。ビトリは後ろでソファに座っていた。シャビエルは母親との間に仕切りをするように背を向けていた。
「残念です、シャビエル。どうしようもなかった」
感情を押し殺した声で「ありがとう」と伝えた。何のためのありがとう？
どうでもいい。冷静を装うひとつの方法に過ぎない。受話器を置いた。シャビエルの背後には母ビトリがいる。振り向くのが難しい瞬間だった。瞳の中の感情を読まれないよう真正面から母ビトリを見ることを避けた。言葉を探した。病院から結果の知らせがあった、という代わりに、報告を聞くために病院に行き、そこから状況を知らせるからとだけ言った。
「もし母さんを侮辱する電話がかかったらすぐに電話を切ってね。約束だよ？」

Source URL: <http://newspanishbooks.jp/read-report-jp/patria>